

大井 嘉七美

次に、毎日新聞社夕刊編集部長、野沢和弘氏に「差別をなくするための条例制定から見えてきたもの」という演題でご講演をいただきました。野沢氏は、千葉県に障害者の差別をなくす条例を作ることに尽力された方で、ご自身も重度の自閉症のお子さんを持つお父様だそうです。親として、社会部の新聞記者としての見地から、条例制定までのタウンミーティングや、議会の様子等を様々な事例を挙げて詳しくお話くださいました。心無い言葉や、いろいろな差別に苦しむ障害者の姿、親としての苦悩を身につまされる思いで拝聴させていただきました。



回、この講演会に参加して、大きなエネルギーをいただいた気がいたしております。いつの日か息子が成長し、名実共に充実した自立支援法のもとで守られ、自立して行ける日を夢見て、支えていただくばかりでなく、自らも家族として「何かできることはないか？」と改めて考えていきたいと思っております。

(小石川保護者)

NHK学園 島村勝巳

ふる里学舎の実習担当者のご配慮により比較的障害の軽い、すなわちコミュニケーションのとれる方3名と面談する機会を頂いた。

3人とも今は寮の食事係をするなどリーダー的存在だが入所までにはいろいろな事があった。今就労に向けて前向きに努力している様子に感銘した。

障害者福祉を考える上で重要な視点はリハビリテーションや、ノーマライゼーションの理念に比べ、それを実現するための具体的施策・サービスの発展が大きく遅れているということである。

今後私たち親子をとりまく環境が、野沢氏の言われるように、それぞれの違いを認め合い、多様性を樂しめる社

○月△日

障害者福祉を学ぶ視点の一つは、それが自分を含めてすべての人々にとっての基本的課題であることを理解することにある。

改めて言うまでもなく人は一人ひとり違う存在であり、背丈や体重が異なるように、手足や内臓のはたらき機能も、頭のはたらき機能も一人一人異なる。



人の一生では、誰もが心身機能の完璧なままで生きる期間には案外と短いことに気づかされる。人生の途中で、また幼児期から、病氣や事故などによつて心身機能の喪失を経験することは、自分や家族にも当然にあることなのである。

その心身機能の喪失があつても如何に積極的な生き方ができるかは、自分を含めたすべての人の課題であること、の理解であることだと思ふ。”そ

わたしは新米園芸家
四ノ宮 広恵

南房総は今、春真つ盛りです。ふる里学舎和田浦の周辺では黄色い菜の花が咲き乱れ、青空との絶妙なコントラストを見せています。

芸科に配属になり、もうすぐ一年になろうとしています。初めてハウスに入った時、金魚草が色とりどりに咲いていて、花色の多さに驚きました。また作業科の雰囲気アットホームで和やか。利用者の皆さんのびのびと作業をしている姿が印象的でした。今でも舌を巻くことが多いのですが、不要な葉っぱを一つひとつ丁寧にむいたり、切り花を運搬したり、草取りがとても上手だったり・。利用者さん一人ひとりが個性を活かし実に真剣に作業に取り組んでいます。

配属当初は私だけが初心者
のような何か心細い気持ち
を抑え、勤務中は明るく振舞
い、帰宅後は花の部位や特性
を学ぶ日々が続きました。支
援員として利用者さんを安
らかにさせるよう、おおんか
に明るく接し、同時に微妙
な動きに対する観察や、体
調の変化を見落とさないよう
心掛けました。

ふる里学舎和田浦のある南房総市和田町は花園という地

名に表されるように、花の栽培が盛んな町です。大型スーパーでの販売や作品展等で、私たちの育てた花が多くの人に買っていただけるのは喜びであり、誇りです。しかし、それにも勝る喜びは利用者さんとの日々の触れ合いです。言葉は少ないのですが、一緒に作業をしていると、純粋な心で優しさを感じます。事実、配属当初の私を支えてくれたというのは「四ノ宮さん」という利用者さんから初めて呼ばれた一言です。緊張して硬くなっていた私を一気にほぐしてくれました。今まで、名前を呼ばれた事でこんなにうれしかったことはありません。受け引きの無いその優しさは、私の原動力になっています。

まだまだ未熟な私ですが、今後とも先輩方を見習い日々研鑽して、利用者の皆さんやご家族に信頼される職員になりたいと思います。

(ふる里学舎和田浦支援員)

編集後記

3月は何か気持ちが高ぶります。寒い冬が終わり、待ちました春が来るからなのかもしれません。4月に向かい新人職員が気になるのか、はたまた今年度こそはと自分を奮立たせているのか……。いずれにせよ一足お先に新年度モード突入。

佑啓六十四号をお届けします。

霜崎 孝行